

咸錫憲思想における全体像研究の新視座 — 「シアル思想」形成史の分析を中心に—

金 京燕

咸錫憲（함석헌：ハム・ソッコン、1901-1989）の思想体系を貫通する最も核心的な思想は「シアル（씨알）思想」である。「シアル思想」は咸錫憲が、ほぼ一世紀に渡る人生経験と社会实践活動での思索の中から形成した思想であり、その論じているテーマは極めて多岐にわたっている。さらに、咸錫憲自身が「シアル思想」を体系的に整理していないため、「シアル思想」の全体像を把握することが極めて難しく、先行研究ではそれが解明できていない。

本論文の目的は、咸錫憲の「シアル思想」が時代背景とともに、どのように形成されてきたのかという「シアル思想」の形成史を研究することにより、咸錫憲思想の全体像を俯瞰するための新たな視座を確立することであった。

本論文の構成は全七章である（第一章[序論]、第二章～第三章[思想と信仰の変遷過程の解明]、第四章～第六章[思想と信仰の特徴および独創性の解明]、第七章[結論]）。

【第一章】

序論では、これまでの咸錫憲研究において何がどの程度まで解明されてきたのかを整理し、さらにそれら先行研究の問題点を摘出し、筆者の研究の出発点と先行研究との接点について検討した。

先行研究には信仰の変遷史からの視点と、「シアル思想」の形成過程という視点、さらに個々のテーマから分析する視点、以上の三つの視点が存在していることが明らかになった。本論文は上述した三つの視点を有機的に結合し、より精密に構造化するとともに、その三つの視点を総合化したものである。そのことにより、咸錫憲の「シアル思想」形成史研究をより新しい段階へと進めることが、本研究の課題であることを提示した。

【第二章】

第二章では、植民地期から1970年代までの咸錫憲の経歴についての分析を通じて、咸錫憲の思想が「民族論」から「民衆論」へと変遷する過程をたどるとともに、「シアル思想」の形成過程を明らかにした。

第一節では、咸錫憲の経歴を考察するとともに、植民地期から1970年代まで、咸錫憲の思想が「民族論」から「民衆論」へと変遷した経緯、および「シアル思想」の形成過程について考察した。

第二節では咸錫憲の「歴史観」および「民族」と「民衆」の概念の変遷過程を分析することにより、彼の思想体系の変遷過程をさらに詳しく説明した。

以上の分析により、咸錫憲の「民族」を中心とする思惟は植民地期に形成され、『聖書朝鮮』に論文を連載することによって「朝鮮民族」の主体性を喚起しようとしたことを明らかにした。また解放後、歴史状況の変化により咸錫憲の思考の中心が「民族」から「民衆」へと変化し、1945年を境に咸錫憲は「民衆」の主体性を考える「民衆論」を提唱するようになったことを明らかにした。そして、1965年以降に行われた講演および著述では「シアル」も民衆も同じ意味合いをもつ用語として使われ、1970年には「シアル思想」を形成したことを述べた。

【第三章】

第三章では、咸錫憲の信仰の変遷過程と「シアル」の概念分析を通して、彼の「シアル思想」にはキリスト教と東洋思想という異質な宗教的要素が含まれていることを解明した。彼が構築した「シアル思想」は、キリスト教（無教会主義とクェーカー）と東洋思想（老荘思想、風流道思想、儒教など）を融合し、個人と神を合一させようとする新しい宗教思想であった。しかし、彼は既存の宗教の教派や教理のみに基づいて自分の思想を展開したのではなく、独自の思惟構造の中で「新しい宗教観」および「シアル思想」を構築していったことを明らかにした。

【第四章】

第四章では、内村鑑三の無教会主義との比較をまず行い、咸錫憲思想の「民族的アイデンティティの確保」という視点から「主体的な民衆論」への発展過程を解明した。そして、「継承と発展」という視点から、個人の信仰問題に対する考察と「修正無教会主義」の位置付けを行った。

咸錫憲の「シアル思想」での個人の信仰問題は、絶対者はあらかじめ決まったものではなく、個人の主体性の活動により、「神と合一する」というプロセスの中で生じたものであった。また、無教会主義思想は、咸錫憲思想におけるキリスト教的要素および、「民族的アイデンティティ」を構築していく土台ではあるが、その後、彼の思惟は「修正無教会主義」を経て「主体的な民衆論」の構築へ展開していったことを示した。

【第五章】

第五章では咸錫憲の「シアル思想」における「神」、「自我」、「信仰」という三つのキーワードを中心に、1953年以降、彼が打ち出した宗教観はどのようなものであったかについて解明した。そのために第四章で論じた「シアル思想」における個人と神の特徴についての内容を補完し、「信仰する自己」と「神」との関係性について、さらに詳しく考察した。

その結果、咸錫憲の「シアル（個人）」と「神」の合一とは、「二重の主体」（筆者による造語）である「自我」の働きによるものであったことがわかった。つまり「シアル思想」の「自我」とは、「個別的な自我」と「普遍的な自我」を意味する。そして、その「個別的な自我」が主体的に活動し始める瞬間に「能動的な神」というものと「合一」することができる。そして、その「個別性」が抽象的かつ普遍的な「自我」に変化するのである。このようなプロセスを経た「真我（普遍的な自我であるシアル）」において、最終的には「主体的な自我」と「能動的な神」という二重主体が働くのであり、咸錫憲の「信仰」とは、「神への帰属という従属性」と「自我の主体性の働き」が併存する構造を持っていたのである。

彼の宗教観の特徴を次の三点にまとめることができる。

① 宗教は人間の内面に必然的に存在すると同時に、世界文明の発展を導くものだとして咸錫憲は考えた。彼における宗教とは、人間が作り出した文化現象ではなく、「神」が「存在するから存在するものである」がごとく、宗教も存在するから「存在する宗教」なのであった。

② 彼において宗教は主体的なものであった。咸錫憲において宗教は救いの道まで到達させるように支える一つのプロセスであって、宗教自体が救いにはならないのであった。

③ 咸錫憲の宗教観は、キリスト教の「神」だけが唯一神だという排他的な思考で

はなく、ほかの宗教における「神」も抱容する一なる宗教、すなわち「普遍的な宗教」であった。つまり、彼はキリスト教のような限界がある教理と教派ではなく、すべての宗教を包摂する一なる宗教、すなわち普遍的な宗教を主張した

【第六章】

第六章では、1950年代後半から1970年代前半における咸錫憲の「シアル思想」の形成過程は、形而上の思想に止まるのではなく、現実の社会活動においても役割を果たしたことを解明した。彼は1950年代後半から1970年代前半までの冷戦体制中に一連の事件を経験し、その経験を通して「民衆論」を確固たるものに練り上げていく。その形成過程に関して、彼の言説を通して分析を行った。

第一節では咸錫憲の1950年代後半から1960年代初頭におけるイデオロギー批判（宗教団体と国家権力機構に対する批判および「4.19革命」への批判、そして「5.16軍事クーデター」への批判）の考察を行った。その中で、咸錫憲の「民衆」は1957年に「草＝民衆」という考えを打ち出すことによって、政治の舞台に登場したことを明らかにした。そして、咸錫憲の「4.19革命」批判において、革命を引き起こす主体は「民衆」としての知識人であり、その革命を成し遂げる主体は「民衆」すなわち農民だと主張したことを明らかにした。さらに「5.16軍事クーデター」については、革命の精神は必要であるものの、軍事クーデターのような革命は起こすべきではなかったと批判し、全体意識を持つ民衆たちの精神革命を待ち望んでいたことを確認した。

第二節では咸錫憲の「平和統一論」を取り上げ、南北の「民族統一」を成し遂げる主体は何であったのかについて検討した。彼によれば、南北の民族統一を成し遂げる主体は南北の「民衆」たちであった。そして彼の「平和統一」は、「南北民衆の全体意識による精神の統一」なのであった。また1950年代から1960年代までの咸錫憲の「民衆論」は具体的な事件を通して、南北朝鮮の「民衆」たちを政治的舞台上に登場させ、抑圧された「民衆」の主体性を発揮させようと努力したことも明らかにした。

【第七章】

第七章（結論）では、「シアル思想」の諸要素を総括したうえで、「シアル思想形成史」とその特質を解明した。「シアル思想形成史」は、①「民族論」から「民衆論」

への変遷。②「民衆論」から「シアル思想」への展開および、それに絡まった「神」に対する理解の変化。③「宗教信仰」の変遷とから生みだされた「新しい宗教観」の構築。④「新しい宗教観」から「シアル思想」への展開過程であった。「シアル思想」は「宗教性の枠の中で捉えた「民衆論」」である。「シアル思想」の概念と思想は固定した不変的なものではなく、時代の推移とともに常に変遷していく「永遠に未完」の思想であった。

同時に「シアル思想」を「民衆思想」、および「世界思想」として唱えた時代的限界、および咸錫憲の思惟方式の限界についても本章で論じた。また、咸錫憲のシアル思想の学術的意義と、宗教学で問われている諸問題に対して如何なる意義があり、歴史社会において、「新しい民衆論」を構築するにはどうすべきかを今後の課題として提示した。

咸錫憲が提唱する「シアル」の意味は複合的であり、思想の形成過程および構成方式は立体的である。本研究で検討した咸錫憲の「シアル思想」形成過程を図式化すると以下のものになる。（「シアル思想形成史構造図」参照）

成錫憲の思想発展の全体を貫くのは「シアル思想」の構築であった。

「シアル思想」は、1945 年を軸に「民族」が主体である「民族論」から「民衆」が主体である「民衆論」へと変化していく。そのプロセスと、キリスト教における長老派から無教会主義へ、無教会主義からクェーカー主義への変遷過程は、ともに最終的に「新しい宗教観」を構築していくプロセスとして相互関連している。

彼が「信仰」の変遷過程で定義しようとした「信仰」の概念は、「自我」が神へ従順するという伝統的なキリスト教の枠組から徐々に離れていた。彼の「信仰」というものは「自我」と「神」の主体性による内在的な合一活動であった。そして、「個人」の主体性と（自我の中に内在する）「神（ハナム）」の能動性により、民衆の主体的な全体意識を喚起させようとした。

「シアル思想」における「自我」は、抽象的かつ普遍的な「自我」と、具体的かつ個別的な「自我」という「二重の主体性」（筆者による造語）を持つ「自我」であった。そして、「神と合一する」活動を認識するのは最終的には個別的な「自我」であった。また、（「シアル思想」における）「神」のシンクレティズム的な要素は、宗教多元主義を志向するものであった。

彼が構築した思想はキリスト教（無教会主義とクェーカー）と東洋思想（老荘思想、風流道思想、儒教）の要素を結合し、個人と神を合一（「神人合一」）させようとする、宗教的な色彩の強いものだった。その「シアル思想」は宗教性の枠組で捉えた「民衆論」を基盤として、社会活動へ参与しようとする傾向を持つ。